

## ESM法による ファミリーレジャー研究の試み

○西野 仁 (東海大学)

ESM、レジャー行動、ファミリーレジャー、

学校の週5日制が月一回だけではあるがはじまった。日曜だけの週末と比較した時、土曜、日曜の二日連休の週末を日本の家族はどのように過ごしているのだろうか。誰と、何時、どこで、何をして、どのような気分で過ごしているのかは、興味あることがらであると同時に、それを把握することは、これからの余暇政策の立案に不可欠なことがらである。この種の研究は、従来 アンケート調査や生活時間調査などの手法を用いるのが一般的であった。これらの調査手法は、回答者が自分の経験を思い出して答えざるをえず、おおまかな傾向の把握には適当であるが、場面ごとに変化する人の行動とそれに伴う心理面での変化については十分な把握ができないという弱点を合わせ持っている。にもかかわらず、経済性や便利さゆえに、多用されてきたのが実状である。

ESM法は、その弱点を埋めるべく1970年代後半にシカゴ大学のチクセントミハイらによって開発された新しい調査法である。ESMは Experience Sampling Method の略で、人のさまざまな日常経験をできるだけ生のまま取り出して分析しようという観点から開発、改良された。ESM法において、調査対象者にはポケットベルと調査期間中に使用する調査用紙が予め配布される。調査者は一日、5～10回、ランダムな時間にそのポケットベルを呼び出す。呼び出された調査対象者は、その時、「誰と、どこで、何をしていたか、また、どんな感じか」などを調査用紙にできるだけ速やかにその場で書き込む。調査は、普通、一週間継続して行われるが、目的によって期間は異なる。

北米を中心として、このESM法を用いたレジャー行動研究は、1980年代後半から増加しつつある。主な研究者として Larson, Mannel, Zuzanek, Chalip, Csikszentmihalyi, Kleiberらの名が挙げられる。

### 1、目的

本研究の目的は、このESM法がはたして日本人のレジャー行動研究になじむかどうかを検討することにある。具体的には、ESM法によるファミリーレジャー行動研究を実施し、回答状況やESM法に対する評価などを明らかにすることにある。

### 2、方法

11家族の両親および中高生の子ども計33名に対し、金曜日から月曜日までの4日間、一日7回ポケットベルを呼び出し、その時の活動内容、活動場所、誰とその活動を行っていたか、気分はどうであったかなどの経験状況について、ESM調査票への記入を依頼した。ESM調査票は、チクセントミハイとラーソンが開発した調査票をラーソンと直接意見交換しながら本研究者が改良したものをを用いた。また、毎日の調査終了後、一日の全体としての気分や調査回答への正確度、一日のおおよその行動などについて、一日のまとめ調査票と生活時間調査票への記入を求めた。4日間の調査終了後、ESM法に対する評価についての調査を行った。

### 3、調査の実施

調査は1993年10月15日(金)から18日(月)まで、東京、神奈川地域で実施された。参加家族はT大学に勤務する41歳から50歳までの11人の家族で、各家族の父、母、中高生のこども一人の計3名が本調査に協力してくれた。その11人は、年齢と家族構成などをもとに大学事務部がつづいた協力者で、その中からランダムに選ばれた。

ポケットベルの送信は、関東地方をカバーするNTTの広域システムを使った。また、事前にポケットベルの受信が危ぶまれる地域への移動が予定されていた二人には、タイマー付きの腕時計の携帯を要請した。

調査二日前にT大学の11人に、調査票への記入方法、ポケットベルの使い方などについて説明し家族への説明を依頼した。

ポケットベルへの送信は、午前7時30分から午後10時30分までの間に、約2時間に一度、計7回行った。送信時刻は、乱数表を使ってランダムに選んだ。送信は2台の電話機から本研究者と研究助手4人が交代で行った。

#### 4、結果

1) 回答数と回答率：ポケットベルは一日7回、4日間鳴ったはずであるから、最大一人につき28、33人で924の場面での回答が期待された。実際に、11家族33人が記入した調査票の総数は813、88%であった。28回全てに回答した者は、12人だった。曜日による回答数は、日曜日がやや少な目ではあったが有為な差は見られなかった。時間帯による回答数は、7:30~9:30が少なめで、逆に20:30~22:30が多かった。家族メンバーによる回答数は、父が最も多く、次いで母、子の順であった。子の回答が少なかった理由は、調査期間が学校の中間テスト期間であったことが影響していたと思われる。

2) ポケットベルが鳴った時刻と実際に調査票への記入時刻の差：回答者は、ポケットベルが鳴ったらできるだけ速やかに調査票への記入をするよう依頼されている。約61%の回答が5分以内に記入された。しかし、2時間以上の遅れが約7%あった。遅れの理由は、外出時に調査票を家に置き忘れたケースがほとんどで、他には、会議中あるいはスポーツ中などであった。

3) 調査方法に対する評価：ESM法に対しては、ほとんどの回答者が面倒だと感じている。しかし、新しい方法であり、興味深く、正確な調査法だとも感じている。ポケットベルに関しては、大きな問題はほとんど無かったが、電車内で聞き取りにくいなどの感想があった。一日7回の記入については、多すぎるという意見とどちらとも言えないという意見がほぼ同数であった。少ないとは感じていない。期間については、どちらともいえないという意見が多かった。自由記述による感想では、「緊張した」「監視されている感じだった」「ポケットベルがいつ鳴るかはじめは緊張した」「仕事中は記入しづらかった」「おもしろかった」「自分の行動を考える機会になった」「ESM調査終了後、調査者が回答者に直接インタビューすることを併用すればもっと詳しいデータが得られると思う」などであった。

#### 5、まとめ

ESM法による行動調査を日本人家族に試みた。回答率、調査票への記入の状況、終了後の感想などは、北米などでのそれらと顕著な差は見られなかった。今後さらに、妥当性や信頼性の検討を行いつつ、ESM法を使ってのレジャー行動研究を進めて行きたい。